

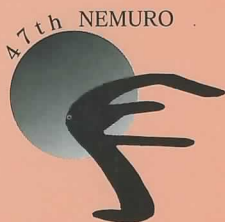
1997

第47回全道造形教育研究大会
根室大会

—研究主題—

感性から発し 躍動する力を育む 造形学習を！

研究集録



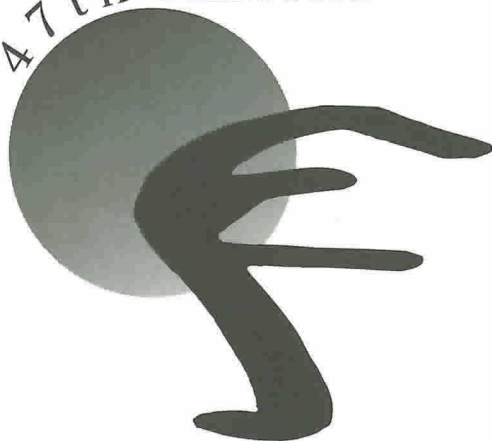
北海道造形教育研究大会
根室大会実行委員会
根室造形教育連盟

第47回全道造形教育研究大会
根室大会

1997.7.28(月)~29(火)

研究集録

47th NEMURO



全道造形教育研究大会

根室大会の集録を発刊するにあたって

第47回全道造形教育研究大会

根室大会実行委員長 鍋谷 尊之

平成9年7月28日・29日の二日間、日本最東端の根室市で行われた第47回全道造形教育研究大会根室大会には、夏休み中にもかかわらず全道各地からご出席下さいまして、誠にありがとうございました。

今大会実行委員会の中核として、根室造形教育連盟にとりましては初めての全道大会だけに、「小・中・高校の造形教育に関する実践交流の場にする事」〔郷土素材を発掘し、教材化すること〕の二点を重視し、研究主題を「感性から発し、躍動する力を育む造形学習を！」としました。

自校研と違って人・物・場所・金とすべてが寄り合わせの研究大会だけに、準備に大きな疲労が伴いましたが、引き受けたからには根室らしさの出せる内容にしようと、根室の素材を見詰め直すところから取り組みました。

鮭の皮の活用、石や流木の活用、粘土の野焼きなど郷土の素材を発掘し、教材化出来たことと、新任間もない教員が意欲的に参画し、鋭意努力してくれたことが大きな成果となりました。

皆様には充分満足のいただける根室大会ではなかったのではないかと多々反省をしておりますが、皆様の適切で心温かい励ましの言葉を受けて「やってよかった」という実感が込み上げてきたところです。

また、社会の変容に伴い、学校教育に「豊かな心の育成」が強く求められている時だけに、人間性豊かな感性を培う図工美術教育の重要さが再認識された研究大会でもありました。

最後になりましたが、「二年間もかけてオホーツク海岸を散策し流木を拾い集めて下さった清水克美先生」〔根室に生育する植物の形態や特徴をとともわかりやすく講演して下さいました栗野武夫先生〕には心からお礼を申し上げます。

更には、本研究大会を成功させるべくご尽力下さいました北海道造形教育連盟本部の吉田俊雄委員長をはじめ、北海道教育庁根室教育局、管内各市町教育委員会、協賛各社、会場を提供下さった根室市立花咲小学校及び根室市総合文化会館の職員の皆様方、本研究大会をいろいろな形で支えて下さった多くの方々に心からお礼を申し上げます。

ご指導、ご支援、ご協力、誠にありがとうございました。

根室における図工美術教育実践の足跡を記したこの研究集録が、今後少しでも皆様のお役に立てるのなら、こんな嬉しいことはありません。

47th NEMURO



目 次

根室大会実行委員長挨拶

大会日程	1
大会寸描	2
根室大会研究主題	4
分科会一覧	9
公開授業一覧	10
分科会討議記録	11
新聞各社掲載記事	50
編集後記	52

(絵) / 清水克美 (標津町教育委員会)



第47回 全道造形教育研究大会根室大会

北海道造形教育連盟研究主題

自らの心をより豊かに拓く造形学習の在り方

根室大会研究主題

感性から発し躍動する力を育む造形学習を!

会 期 平成9年7月28日(月)・29日(火)

会 場 根室市立花咲小学校(1日目)・根室市総合文化会館(2日目)

日 程 ◎大会第1日目 7月28日(月) 根室市立花咲小学校

	8:30	10:10	11:00	11:50	15:30	20:00
受 付	開 会 式 研 究 発 表	歓 迎 セレモニー	移 動・休 憩 公 開 授 業	昼 食	分 科 会 研 究 協 議	市 内 名 所 観 光 め ぐ り ス ケ ッ チ 行 歓 迎 交 流 会
	9:30	10:40	12:30	18:00		

◎大会第2日目 7月29日(火) 根室市総合文化会館

	8:30	9:50	11:30
受 付	体 験 学 習 ☆造形遊び	移 動・休 憩 記 念 講 演 会 根 室 の 植 物	休 憩・準 備 閉 会 式
	9:00	10:10	11:40

主 催 北海道造形教育連盟・根室造形教育連盟
 主 管 第47回全道造形教育研究大会・根室大会実行委員会
 共 催 北海道教育委員会・根室市教育委員会
 後 援 別海町教育委員会・中標津町教育委員会・標津町教育委員会
 羅臼町教育委員会・根室教育研究所・根室管内小中学校校長会
 北海道根室支部高等学校校長会・根室市小中学校校長会
 中標津町教育研究会・根室市教育研究会・別海町教育研究会
 中標津町教育研究会・標津町サークル協議会・羅臼町教育研究会

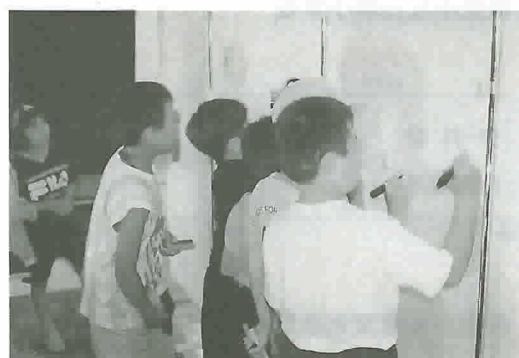
大会寸 描



開会式での実行委員長挨拶



粘土の授業は楽しいね
～小1・第5分科会～



大きな画面にチャレンジだ
～小3・第1分科会～



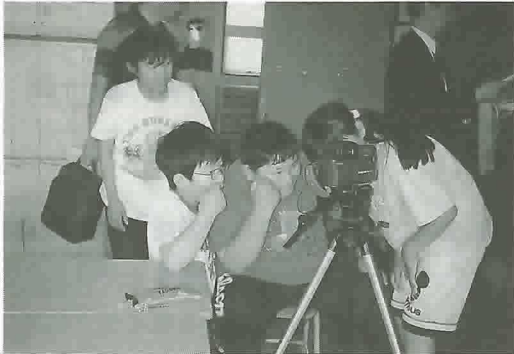
“力を合わせて” 版画の共同製作
～小5、6複式・第2分科会～



中学生の“小石”との対話
～中1・第6分科会～



自分の土器づくり
～小5、6複式・第4分科会～



ビデオカメラのうつり具合は…
～小5・第3分科会～



イラストのアイディアに一点集中
～高2・第8分科会～



鮭の皮を使っの手作業
～中3・第7分科会～



体験学習「造形遊び」から
～第2日目～



歓迎セレモニー「吹奏楽」
～根室市立柏陵中学校～



第47回 全道造形教育研究会根室大会
記念講演 「根室の植物」 講師 栗野武夫氏

記念講演「根室の植物」
～第2日目～

研究主題

感性から発し躍動する力を育む造形学習を！

根室大会実行委員会研究部長 大井 誠一郎

研究主題設定の理由

いわゆる感性とは、感受性とも書き表せる。刺激に反応する感覚器官の能力を指している。したがって、子どもが外界の“あらゆるもの”から何らかの感動的刺激を受けることにより反応する感覚器官の働きに期待が寄せられることで造形学習がある程度成立していたと思われる。

しかし、これでは主体的なメカニズムとは程遠く、何か物足りない感じが全くしないでもない。かつて、無気力・無反応・無感動など××無主義時代到来と言われたが、まさに《ただなんとなく生きている人間》を象徴化したような的を射た言い方なのであろう。

北海道の大自然は素晴らしいと言われて久しい。たまたま、本州方面からやって来た旅行者などから、広い大地に感動する場面があちこちで頼もしく聞こえてくる。

とりわけ、この根室地方も大自然の宝庫である。そんな自然環境の中で育っている子どもたちをして、根室の大自然に対して感動させること自体は容易なことではないか。《感性は、磨かれてこそ本領を発揮するもの》とも言われる所以である。

感性を磨くとは日ごろから具体的に一体どのような教育活動を指しているのであろうか。子どもによっては、放っておいてもおのずから磨かれている者がいる。それは、美的才能に富んだ“天才”級の場合であろう。

そういう例外的なことを除いてみると、《感性を磨くこと》とは即ち《素直な心になりきること》であろう。ここに、「造形活動（学習）を通しての人間教育」という大きな目標があるのであろう。この《素直な気持ち》が《躍動する力》へのキーワードであり、造形学習への基本の中の基本であると押えるのである。

「点」にすぎないところの《素直な気持ち》を持続させることでそれが「線」になる。それをキープした形で《躍動する力》への指導・支援がどのようにかかわってくるかによって、「面」や「立体」へと発展できるかも知れない。そうすることによって、大自然そのものである、素材の宝庫としての根室の風土がはじめて生かされてくるのではないだろうか。

主題について

《根室大会・キャッチフレーズ》

【今こそ郷土根室を、**豊かな感性**で掘り起こそう！】

造形活動とは、事物・現象に接し、触れて、感じ取り、気持ちや感情に移入して、技を持って《新たな形》をつくることである。

《素直な気持ち》を造形活動を通して一段と《研ぎ澄まされた心》に持っていくことにより、おのずから《躍動する力》が沸き上がってくるメカニズムを体得させることが、この教科の指導ポイントとしておさえない。

- ① その行為（造形活動）の連続によって心が高まる。
- ② その心が**感性**を高める
- ③ その心が**技**を高める。
- ④ その技がさらに心を高めていく。

- ・そういう《造形教育活動》本来の営みをより具体的な形で、より効果的に教育場面の中に定着させること。
- ・子どもに内在する力を“よさ”として引き出し、伸ばすこと。
- ・新しい変化のある時代に生きる能力を持った人間を育てること。

これらのことから研究主題を、

「感性から発し 躍動する力を育む 造形学習！」

とし、人間形成の役割を担う教科としての存在価値を、内外に確かめようとした。

豊かな 感性 とは何か？

ここに、子どもにとって、感性の豊かさの育ちが充分なる条件として浮上してこよう。

日頃から図工科に限らず、他教科において勿論のこと、全教育活動において《感性を磨きあげる》こと自体、異論はなかろう。

①接して、触れて、感じ取ること

《事例として》

- ・流木を素材にして【ある人物表現】を共同制作で試みた。僻地小規模なので、全校縦割りグループで取り組み、【モチーフ】を特定せずに造形活動をすすめた結果、結構面白いものが出来上がったのだった。そこで、作品鑑賞として何人かの子どもに人物像のイメージを発表させたところ、ガリバーとか幸福の王子とかあった中で、軽度の知的障害をもつ女兒が「村山首相（当時）に似ているよ。」と発言した。普段、テレビのニュースなどを見ていないとなかなかこうは行かないのではないか。

《発想の転換として》

- ・根室に限らず、本州の梅雨時は北海道も《濃霧注意報》の連発で決してカラリとした天気は続かない。～だから「写生会」は、初夏時分よりも秋口に限る。～という考え方も成り立つが、この濃霧を逆手にとって根室の風土を“写生”しようとするればどうであろうか。淡いタッチの中にも遠近感をどう工夫させるか。水墨画の朦朧とした中国の一流派を漂わせるような方向に出るであろうか。ただし、その場合《白色》は極力使用しないことでアプローチさせてみるのも一考であろう。要するに、濃霧の表現活動を通して郷土への**再認識を図ること**こそが、掘り起こそうとする試み自体そのものなのである。

豊かな 感性 とは何か？

子どもの体内に“怪物君《躍動感》”を呼び起こそう！そのために常日頃からどのような指導の蓄積（積み重ね）が不可欠なのだろうか。

②気持ちや感情に移入すること

教師が図工の授業中、個別指導として机間巡視をした際に、子どもによっては、製作中の作品を教師の目から避けようとして覆い隠そうとする光景が見られることがある。

そういう場合は、まず、子どもの方に《自信がない》こと。教師への人間関係において、敵意あるいは恐縮、羞恥心、照れ隠し、完成後に周りをアツと言わせようという企ての意図のあらわれ、その他様々な思いが子どもの側で、意外なほどしっかり働いていること。

☆ ☆ ☆

では、《自信をもたせる→のびのびと表現活動ができる》ためには、常日頃からどう指導すればよいのだろうか。

子どもをその気にさせて、感情移入への初歩的訓練を増やしていこう

1. すぐ「作品」づくり≠造形学習

【練習→エスキース《作品部分の基礎演習》→作品】のような指導過程の流れを小学校高学年、中学校・高校段階ではしっかりと踏まえること。おもしろそうだ！やってみよう！のように意欲関心態度を喚起させること。手順を踏んで技法をも高める。

2. 造形学習の時間以外にも有機的に造形活動を考慮すること

【教科】・国語→挿絵づくり、紙芝居づくり、新聞コラム

・生活→造形あそび、飾りものづくり、看板作り、ゲームづくり、素材集め、野外活動

・理科→自然観察、観察スケッチ、図表表現

豊かな 感性 とは何か？

- ・理 科→物体の質感学習、自然現象の偉大さ、地質・地層の歴史の変遷、宇宙の神秘
 - ・社 会→異文化・歴史的造形文化遺産への興味、地球・人類規模に立脚した考え方への関心
 - ・算数(数学)→平面、立体の構造感覚、幾何学的発想、図表・グラフ表現の理解、平面・立体表現への関心、無限大等への興味
 - ・音 楽→リズム感・音程感の体得、音楽的表現による感動体験、音楽的鑑賞による感動体験、作曲（即興表現）によるイメージの構築
 - ・体 育→運動的リズム感の体得、身体表現としての感動体験、身体的躍動感の体得
 - ・家 庭→生活全般から造形的感覚を視点にすえた学習体験(衣・食・住)
- 【道 徳】真、善、美としての道徳的価値観を心の視点から見据えようとする関心・態度、道徳観から発する感動的体験
- 【特 活】ボランティア（対人・対物関係等）活動を通しての感動的体験、諸イベントへの造形作業的体験、集団行動における規律的体験、野外宿泊等による自然体験的学習

☆

☆

☆

以上のように、様々な方面からの有機的な関連を受けた形での経験を**造形学習に生かして**いかなければならない。そのことがある程度子どもたちの脳裏に焼きつくように理解されているならば、たいへん素晴らしい幅広い感性が造形学習以前に成立していることになろう。

第47回全道造形教育研究大会・根室大会分科会構成

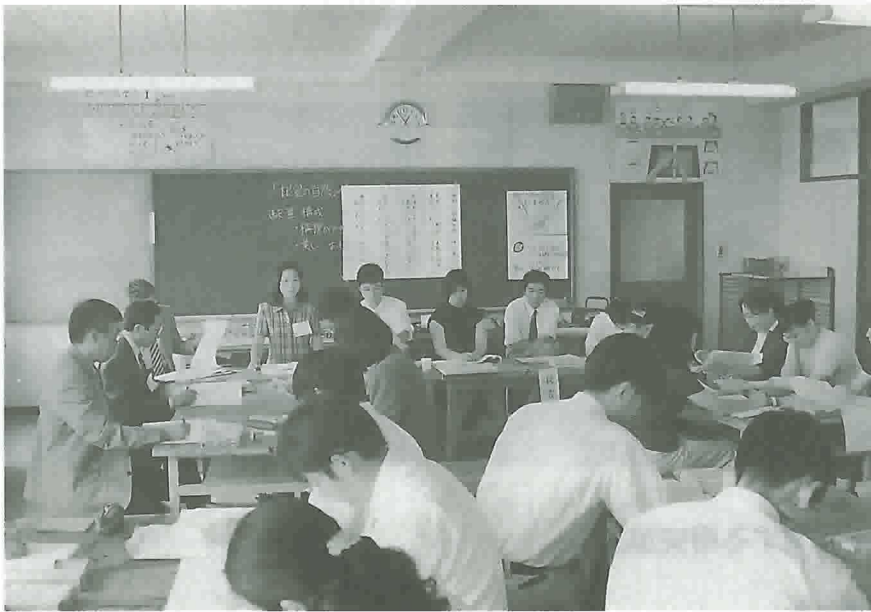
分科会	1		2		3		4	
授業者 担当	小学校第3学年 「トレッシングペーパーを使って」		小学校第5・6学年複式 「共同版画」		小学校第5学年 「ビデオを使って」		小学校第5・6学年複式 「オンネトー焼き」野焼き (雨天の時は焼き物の成形)	
授業者	船山美樹	花咲小	柏尾和市	若竹小	中嶋能亜	花咲小	煤賀克文	幌茂尻小
提言者	矢口少子 阿部孝彦	西竹小 釧路・浜中町・茶内小	阿部雅美 佐々木忍	美原小 留萌・留萌市・藤山小	石橋一郎	網走・斜里町以久科小	和田浩司	十勝・幕別町中里小
司会者	生田和江 成田慎司	釧路市・清明小／上川市・名寄東中	松本とも子	豊原小 日高	小原緑	豊原小	鈴木秀明	函館・函館市昭和小
助言者	高木英機 竹内堅治	計根別小・留萌・小平町・鬼鹿小	伊藤孝三 細見浩	若竹小 連盟顧問	桐澤享 藤井正治	連盟顧問 札幌東園小	大井誠一郎 中島欣也	中標津小 釧路・厚岸町・床潭小
記録者	築詰佳緒里	野付小	小出秀朋	啓雲中	山田妃呂美	別海中央小	鈴木悦子	花咲港小

分科会	5		6		7		8	
授業者 担当	小学校第1学年 「粘土遊び」		中学校第1学年 「石に描く」		中学校第3学年(選択) 「鮭の皮を使って」		高等学校第2学年 「根室のガイドマップ」	
授業者	山口長伸	落石小	長谷川恵美子	柏陵中	館山唯郎	広陵中	加々谷由理子	根室高
提言者	山口雅子	帯広市 開成小	和嶋弘美 三浦正輝	厚床中 和田中	角田尚美 西村司	広陵中 石狩・江別第二中	安藤和也 本田勝哉	根室西高 札幌丘珠高
司会者	中川真一郎 内山博之	檜山乙部栄浜小／釧路教大附属小	庄子展弘 佐藤宏茂	中標津中 胆振・室蘭・鶴ヶ崎中	大溝雅之 里見貴史	春松中 網走市・網走第三中	久保英樹	柏陵中
助言者	小野寺宏二 竹内洋嗣	薫別小 網走市・網走西小	本川勝敏 佐藤公毅	和田中 胆振・苫小牧・光洋中	川原和一 山理利春	野付中 旭川市・旭川中	清水克美	連盟顧問
記録者	熱海桂子	上春別小	小林玲子	齒舞中	下西明美	上西春別中	齋藤由紀子	別海中央中

公開授業

校種	内容・分野・分科会	学年	題材名	授業者
小学校	つくりたいものをつくる ＜第1分科会＞	3年	霧のむこうに	船山美樹 (根室市立花咲小学校)
	共同版面に表す ＜第2分科会＞	5・6年 《複式》	自分の思いを 彫りに込めて・・・	柏尾和市 (中標津町立若竹小学校)
	絵や立体に表す ＜第3分科会＞	5年	CMをつくろう ービデオを使ってー	中嶋能亜 (根室市立花咲小学校)
	立体に表す ＜第4分科会＞	5・6年 《複式》	温根沼の砂や貝殻等も 使って土器を作ろう	煤賀克文 (根室市立幌茂尻小学校)
	立体に表す ＜第5分科会＞	1年	粘土あそび	山口長伸 (根室市立落石小学校)
中学校	自然との対話 ＜第6分科会＞	1年	石に描く 根室の自然を デザインしよう	長谷川 恵美子 (根室市立柏陵中学校)
	素材から発想して ＜第7分科会＞	3年	鮭の皮を使って	舘山唯郎 (中標津町立広陵中学校)
高校	デザイン・表現 イラストレーション ＜第8分科会＞	2年	根室のガイドマップ	加々谷 由理子 (北海道根室高等学校)

分科会討議記録



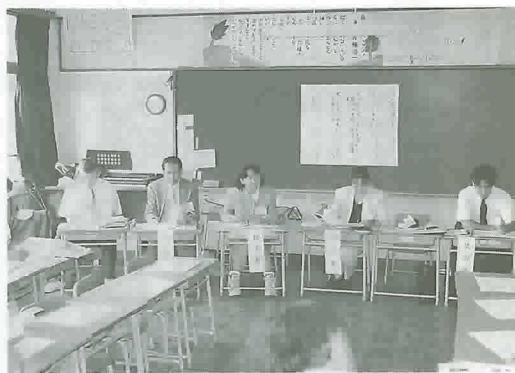
分科会 1 小学校第3学年「霧のむこうに」

司会者	釧路市・清明小	生田和江
司会者	上川・名寄東中	成田慎司
助言者	中標津町・計根別小	高木英機
助言者	留萌・小平町・鬼鹿小	竹内堅治
提言者	中標津町・西竹小	矢口少子
提言者	釧路・浜中町・茶内小	阿部孝彦
授業者	根室市・花咲小	船山美樹
運営・記録者	別海町・野付小	築詰佳緒里

討議の柱

その子らしい感性で表現活動ができる造形学習

1. 造形学習の意欲を喚起させる題材の選択と指導・支援の工夫
2. 子どもが本来もっている感性を表現活動でいかにのばすか
3. 子どものよさをみとる評価のあり方



1. 授業に関する研究協議

(1) 授業者から

- 本時の授業内容の変更について（研究紀要と異なった経緯）

地域に根ざした題材と言うことから霧を取り上げた。

授業での扱いについては、トレーシングペーパーを重ねていくことによって下に描いた絵が見えなくなっていくたり、又、めくる事でだんだん見えてくるという制作活動を通して、霧（ペーパー）によって光が広がったり淡くぼやけるようすに興味をもつこと。そして、工夫して表現活動を深めることをねらいとした。

しかし、ペーパーを生かすという意味では重ねて利用することよりも、光を通した方が、良いと考えた。さらに、児童の実態を考えると、活動に行き詰まる児童がいることが考えられた。折り紙や、絵を描くなどの遊びが好きな児童の実態から、暗幕を使って暗くしたりライトを使って照らすなどの変化も、意欲的な活動につながると考え、本時の内容（点滅ライトに折り紙のように折ったものをかぶせるや、大きなペーパースクリーンに直接マジックなどで描き、裏からOHPライトで照らしてみる方法）に変更した。同時にねらいも遊び感覚で自由に活動の方法を選択し、ペーパーの性質である光の変化を楽しみながら教室を飾り付けることとした。

●本時の学習について

教師の見本を導入場面で見せてしまったため、自分のイメージを膨らませることができた児童と、教師の見本と同じものを作った児童とにわかれてしまった。しかし、創作活動はのびのびと楽しく取り組んでいた。

結果としては、《電気がついてきれい》やスクリーンに写った影をみて《おもしろい》に終わってしまったように思う。スクリーンに写った影を写し取るなどの活動を期待していたが、発展しなかった。トレーシングペーパーの写し書き以外の使い方に気が付いてほしかった。さらに気づいたことを発展させて、自分なりの工夫をしながら活動を楽しんでほしいと考えた。

光を使って遊ぶという感覚で行うことができ、本時の作品を2学期まで取っておいてほしいという子どもの意見が出たのはよかった。

(2) 意見交流

- 光を使ってというテーマがよかった。
- トレーシングペーパーや光を素材とした理由は。
- 根室の地域からカニ、海などを連想することができるが、もう一つの霧が多いということに目を向け、霧を表現する活動を考えた。
色や光は通すが、遠くのものかぼやけたり薄い光に変化したりなどの見え方の変化を、ペーパーの性質を利用して活動できると考えたから。
- 光とトレーシングペーパーとのかかわりで、点滅ライトは霧をうまく表現できたがOHPライトではその効果がなかったと思う。
- 最初の授業案通り、もっと霧にこだわった内容で深めた方がよかったと思う。事前にペーパーの性質について深めておいて本時に臨めば、さらに材料を工夫できたと考える。
- 子どもの実態を考えて内容を変更するのではなく、行き詰まる児童がそうならないような準備や支援をすれば、内容を変えずとも題材に子どもたちがこだわっていけると

思った。内容的には、ライトのみに絞った方がよかったのではないか。

- 本時に至るまでの2時間の活動はどのようなものであったのか。
- 教師が霧の話をつくって話し、児童に霧のイメージを聞いた。《暗い》《こわい》《白い》などのマイナスイメージがほとんどであったが、数名は、《明るい》や、《夜は車のライトだけが見えておもしろい》、《光が広がっておもしろい》などの意見を聞くことができた。
- 具体的にどんなお話をしたのか。
- お話ではなく、《霧のむこうに何かがいるよ、目が光ってるよ、何だろう?》《霧のむこうに影が浮かんでいるよ、何だろう》などの問いかけから自由に発想を膨らませた。
- 根室らしい、授業「霧のむこうに」に大変興味をもった。
- 霧のもつ、ぼわっとしたよく見えない、柔らかな光に様々な色を持たせることで、美しい霧のイメージを膨らませる事ができる題材だと考える。
- 児童の活動は、「絵」にこだわらず、色や光に視点を置いてはどうか。スクリーンに直接描くのではなく、描いたものをスクリーンから離して写すなどの工夫で、もっと霧に近づけたと思う。発想がよかっただけに残念に思った。内容を変えずに臨んでほしかった。
- 霧に対するイメージを十分なものにできるような働きかけも、教師の支援になると思う。霧の風景写真などを利用する手もある。
- 教師の支援についてはいかがか。
- 自校では教師のお話の途中から、児童が続きを考えて作文し、さらに絵に発展させるという取り組みを行っている。今回の授業では、題材の扱いが自由すぎて表現が広がりすぎ、テーマから離れてしまったように思う。
- 教師側の「作らせたもの」の思いが伝わらなかったように思う。
- 教師が最初に見本を見せてしまうよりも、児童自らがいろいろためしながらイメージを広げていける場面があるとよかった。キャラクターに頼ることもなかったと思う。ペンで直接描いてしまうよりは、切り貼りして表現させた方が光を楽しむことができたと考える。
- 活動を造形遊びとして押さえるのであれば、児童が気づく場面の設定が必要であった。
- 自由の中にも条件を作る必要があると考える。全体の目当てに行き着くまでの個人の目当てが必要である。自由の中にも最低限の条件の設定をすることで、活動の目当てが決定できる。条件としては、制作には必ず使うもの、使ってはいけないものなどがあると良かった。準備する材料を工夫し選択の枠を広げても良かったと思う。児童の実態から一人一人に育てたい力をはっきりさせる授業の組み立てが大切である。
- “造形遊び”であっても、教師の「ねらい」を条件として押さえ、そのうえで自由と

すべきではないか。

- 難しい授業だと思った。霧＝トレーシングペーパーが児童側から出てくるのが理想だが、低学年では難しい。トレーシングペーパーを使って霧がかかった状態をどのようにして表現するのかの発見につながられたら良かったと考える。
- OHPの光源は強すぎた。霧のように見せるためには教師の準備にも工夫が必要であると感じた。

(3) 提言者から

— 竹内堅治先生 —

根室の「ねー熱中・むー夢中」が良く現れている授業であった。

児童の霧に対する思いを新たなものにできる良い題材であった。

3年生にとっては難しい内容に感じた。

図工の“自由”については、ねらいや目標を実現させるための条件の設定のうえで成り立つ。本時の内容は霧へのこだわりを深めた方が良かった。実際に見る霧の出す情景の美しさは素晴らしいものである。授業の中で再現するためにはもっと選択できる材料を豊富にし、イメージできる幅を広げてあげることで、“かすんで見える”良さの追求をする楽しみ方ができた。

児童の様子から、《楽しい》、《もっとやりたい》が感じられた。今後の活動に向けての意欲につながられたと思う。



— 高木英機先生 —

地域の素材を生かすという内容としては大変良かったと感じた。

霧＝トレーシングペーパーの発想は素晴らしい。

できない児童もできないなりにイメージできるような教師のはたらきかけがあれば良かった。教師からの「霧に見えるでしょ」の言葉がイメージを固定化させてしまったのではないだろうか。行き詰まるだろうと思われる児童に合わせて内容を変更するのではなく、できないと訴える児童が工夫して取り組める教師の支援が大切である。

試行錯誤する場面、条件の設定が必要であった。

2. 提言に関する研究討議

— 矢口少子先生 —

● 提言のテーマ

☆体験を通し（積み重ね）自分なりに作品に取り組める力の育成

☆技術を学ぶ

◎ 日常取り組んでいる内容について —— 指導の進め方 ——

自分なりに作品に対して理解して制作できる力をつけたい。

絵を描くために必要な画材の使い方や描き方を重視して取り組んでいる。

大作（4つ切り）の作品は1点ぐらい

小さな習作で技術を学ぶ。

・色について

児童が常識として見ている色を見直させる。

肌は肌色、葉は緑色などの絵の具そのままの色ではなく、様々な色で表現させる。

2色の色からたくさんの色を作らせる。

水の量の工夫

・デッサン力について

植物や人物（自画像）を通して良く見て描くことを重視

1点集中から全体へ広げる方法

1点から集中して描く方法については、集中して取り組むことができるようになり効果があった。色使いについても工夫が見られるようになった。自由な構想については不十分だと考える。

2学期にさらに様々な体験を重ねて、独自の構想をもった作品作りに取り組ませたいと考える。

● 提言のテーマ

☆楽しい活動を通して、完成させるための疑問をもたせ、作品製作へつなげたい

◎ 図工の学習での絵画嫌いの克服のために

- 理由として考えられる事柄を取り除く授業内容の工夫について

日常の児童との会話を増やし、一緒に黒板の落書きをするなどの活動を通して全体の前で表現することの抵抗を無くする。自分以外の絵についての良くない評価はいわせないようにしている。

大作の制作を全員で行い、意欲を高めた。(遠足の絵)

風景の中の人物は棒と丸で表現させたが、後に人間らしい表現をしたがるようになった。また、下書きはボールペンで行わせ間違っても消せないことから、別のものに描き変えたり、反対に失敗から成功に変えさせるなどの工夫をさせた。

実際にあったものから創造を広げて、実際にはなかったものも描かれていった。

廊下の掲示による良くない評価に対しても気にしなくなっていた。

- 色について

絵の具に対する偏見を取り除きたい。

絵の具2色から始まって3〜たくさんと使える色の数の条件を変え、「きれいな色づくり」に取り組んだ。

《ハワイ》いろなどの条件を与え、そうぞうさせて色づくりを行った。

混色の工夫が見られた。

パレットの使い方の工夫。全員のパレットの種類が同じなため指導しやすかった。

2学期には“好きなものを描こう”の取り組みを予定。キャラクターも認め形を重視せずに、色をぬる活動を行う予定。

(3) 意見交流

矢口先生 (技術面を延ばす指導について)

◎ 人物の指導はどのように行ったのか。(アニメのようにならない指導法)

- 特に行っていない。ただ動きのない表現に動いて見えるような、例えば手の指を描くなどの指導を行った。

◎ それまでの一つ一つの課題が、大きな作品の制作につながっていると思うか。

- よく見て描くということについては成果が見られる。また、色の工夫などでも成果があった。

- ◎ていねいな作品で大変よいと思うが、1学期は絵のみに取り組んだのか。
- ・今回の研究会に向けて特別1学期に集中させたことと、以前から重ねて学習し、技術面の力をつけたいという思いがあった。
 - ・2学期は季節的にもさまざまな造形に取り組む環境ができるので、思いきり楽しんで活動させたい。
- ◎教師の指導で描き方を学習するのと、一人一人の子供の発達に応じて自由に取り組ませる方法とどちらが良いと考えるか。
- ・同じ題材を使って描き方の指導を行っても、それぞれの児童の個性が出ていると考える。今回の取り組みは、描く学習と割り切っている。今までの自分の表現の仕方を別の表現に変えることができるということを体感し、描く事ができないという思いを取り除くことができたかと考えている。この学習方法が図工のすべてとは考えていない。
 - ・学習の中で、子供に一生懸命な姿があり、その中で工夫する様子が見られ良い面も有る。
- ◎子どもの感性をのばすことを重点にしなければならないと考えるがそのことについてはどうか。描く練習を子どもが気が付かないように取り組まなければ、ただの練習で、感性が押さえられてしまうのではないか。
- ・自由に描くことの“自由”を取り違えている傾向があるように思う。ただ自分の好きなように取り組ませることで、身につく内容をほとんど期待できない。活動の中で子どもが“表現の方法を知りたい”や“どのように描いたら良いか分からない”などの疑問をもち、そのときに知った内容は身につくやすいと考える。しかし、いつ、どの段階でその指導を取り入れるかが難しい。
 - ・描き方の指導は、技術指導でしかない。大人のイメージを子どもに押し付けてはいけない。描かせたい絵の指導を行うとパターン化してしまう。
 - ・図工では個性を重視し、自分らしい表現の仕方ができるよう様々な場面で様々な体験を積ませる学習に取り組ませることで、感性、心が育って行くと考えている。
 - ・教師は、子どもに体験から発見を生ませるためのかわりをするのが大切だと考える。

阿部先生（楽しく活動し、疑問をもって完成させる指導について）

- ◎人間を丸と棒で表現させ、子どもが活動の途中で発展させたいという思いをもてるように、取り組みの初めは表現方法を広く取るのは良いと思う。（初めから表現に詰まらないように）子どもに必要な技術を“適切に”指導することが大切だが、この“適切”な場面をどのように考えて指導しているのか。

- 図工の時間は雰囲気自由にして、作業は個人や集団など様々な形態で行っている。迷っている子どもがいれば、その子に必要な助言をするようにしている。その場面で注意を向ける他の児童もいる。このようなかかわりで、自分の作品に対して改めて考えをもったり、他の人への助言を自分に置き換えて工夫できるなどの活動ができれば良いと考えている。
- これまでの図画は、大きさも色も形も教師が一方的に指導してきた経緯があると思う。一人一人の良さを見取り、ふさわしい題材を学習に取り入れることを問われている今、表現する画材は絵の具だけではないと考える。子どもが充実した思いで活動できるよう教師が内容を吟味して準備する事が重要である。しかし、作品展などでは、描かせた絵が良い作品として評価され、大人の感性で見て立派だと思える作品は教師の手が入っているものと誤解されることも出てきた。評価の方法も子どもの感性を育てることにつながっていくと思った。
- 個性を伸ばし、子ども一人一人の感性を育てるためには、計画された描き方の指導をやめなくてはならない。

(4) 助言者から

— 竹内先生 —

子どもの表現活動を取り上げ過ぎると図工科の持つ主なねらいから外れてしまうであろう。

表現する力、感性、個性をどう育てていくか、また、そのためにはどのような題材をどのように与えていくか、このバランスを考えることが大切だと思う。

— 高木先生 —

技術を指導することは間違いではない。それをどのような場面で、どのように指導を取り入れるかで、子どもの力につなげられるかを考えることが大切だと思う。つまり教師が、与えた題材から子どもが持つ様々な疑問に対する準備をしておくことや、個々に育てたい力や個々に応じた評価を持つなど、深い読み取りのもと、学習の題材、また、内容を用意しなければならないと思う。



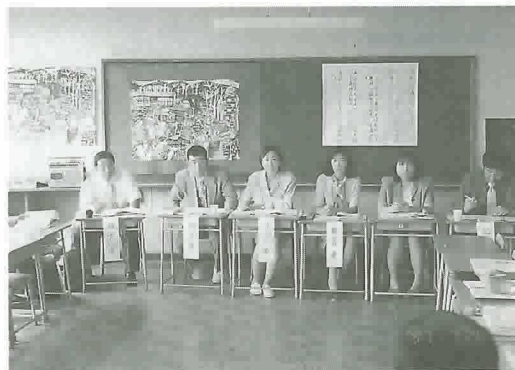
分科会 2 小学校第5・6学年(複式)「自分の思いを彫りに込めて…」

司 会 者	別海町・豊原小	松 本 とも子
助 言 者	中標津町・若竹小	伊 藤 孝 三
助 言 者	標津町・連盟顧問	細 見 浩
提 言 者	別海町・美原小	阿 部 雅 美
提 言 者	留萌・留萌市・藤山小	佐々木 忍
授 業 者	中標津町・若竹小	柏 尾 和 市
運 営 ・ 記 録 者	根室市・景雲中	小 出 秀 朋

討議の柱

その子らしい感性で表現活動ができる造形学習

1. 造形学習の意欲を喚起させる題材の選択と指導・支援の工夫
2. 子どもが本来もっている感性を表現活動でいかにのびすか
3. 子どものよさをみとる評価のあり方



1. 授業に関する研究協議

(1) 授業者から

今回は、全体計画の中での《本刷り》で、子どもたちはとても良く協力的に取り組むことができたと思う。今までの学習活動の積み重ねがなんとか功を奏して、本時の展開へとスムーズに移行することができたと押えたい。特に、動物(牛)の写生や絵日記などには重点的に普段からの心の耕しを図ってきた。

その結果、子どもの素直さを表す力のようなものがある程度発揮されてきたのではないかと考える。

これまでの実践を振り返ってみると、授業だけではなく放課後なども精力的に使った

りして時間的には充実していたと思われる。今後の課題としては、全校児童がわずか20名足らずの中で生活を見つめてみると、そのままではいかにも「日常が平凡なままに終始してしまう」ことで、行事などを通して“感動体験”をつかませるようなことで常に心がけていきたい。

普段の取り組みから、ポイントを3点に絞ってみると、

- | | |
|-------------|---------------|
| ☆心の耕し | 〔絵日記から〕 |
| ☆本時までの手順 | 〔本校の伝統的学習の流れ〕 |
| ☆感性を磨き感動体験を | 〔豊かな表現を求めて〕 |

(2) 意見交流

◎授業を受けていた児童は、皆農家を営んでいる家族の子供なのか。

- ・約半数はその通りで、地元地域の農家の子供たちであり、後の半数は本校の特認校児童として町から通学している子供たちである。

◎町の子と地元農家の子との“差”で困ったことはあるか。また、それはどんな事か。

- ・この図工科の造形学習に限って言えば、特認校児童は、転校してきて日がまだ比較的浅く、学校以外の地域のことをあまり知らないのが実態である。したがって、地域に根ざした題材設定の場合は、当該児童には特に体験学習の要素を意図的計画的に十分取り入れながら考慮したつもりである。また、地域児童が、必要に応じて友だち同士で支え合ったり、事ある毎にフォローしていったことも協調性や協働性を伸ばしていく見逃せない場面でもある。さらに、技術面では、下学年からの本校独自の伝統的な積み上げによるところが大きいので、転校生は、1からスタートすることが少なくない。こういう流れに沿って、本校では毎年《版画文集》を作成している。

- ・これは、作文と版画作品による構成で、今年発行で26号目になる。

◎彫刻刀のそれぞれの特徴をつかませる授業を行っているのか。

- ・最初は基本として取り扱う。だんだん複雑な技法へと発展的におさえていく手法である。

◎7人の子供の個性（版をつくる段階で）をどう生かすように版をつくっていったか。

- ・6年児童の1人が《地域らしさを出そう》ということで、「牛」を中心にして、遠景には「サイロ」「西別岳」などの声があがり、それぞれ分担して自分の取り組みやすい要素を決めていった。

◎何故、共同版画にしたのか。一人一人に版画をさせた方がかえって一人一人の個性を生かすことになり、表現しやすかったのではないか。

- ・いきなり“共同版画”という授業ではなく、まずこの授業を行う前に“個人版画”

を行っているというパターンである。前段では彫刻刀の使い方などの基礎基本を学ばせる。それから後段で、共同版画に取り組み、子供同士の交流を図りながらみんなで一つの目標をおさえていくやり方である。仲間づくりをしながら、あわせて創作の喜びを分かち合い、本来の目的を達成させるということである。

◎どういうことをポイントとして感性（特に感動する心）を養っているのか。

- 学校行事や地域行事などで楽しかったことをまず作文に書く。それから、版画におこしていく。こういった一連の作業が感性を磨くことになっていく。そういう継続を綿々と実践していくことに尽きるということである。

◎体験することと感動することを考えると、一人一人が感じたものをそのまま集団として表現させては支障が起きないのかどうか。つまり、それを共同版画にしまうと、全体の調和が重視されるので、一人一人の個性や良さが出にくいのではないか。

- 画面を分割して、部分の分担を割り当てるときにいかにも機械的な割り振りを教師側がすれば、そういう懸念が起きることも想定されてこよう。しかし、子供同士の主体的な話し合いによって自分の得意とする分野や好き嫌いなどが相互評価によって再認識される場が期待できるわけである。どうしても本人にとって厳しい箇所は、協働精神によるフォローが生きてくるわけで、一人一人の個性がいかにも区画どおりくっきりとはあらわれないかも知れないが、地道に滲み出てくるというか、そういう表出の中での表現もこれからの鑑賞領域における評価の一角を占めてもよいのではないか。

◎版画にも表現できるものと、できないものがあるのではないか。子供にそれを自由に選択させてみてはどうか。牛は彫り過ぎているので、もっと面の構成や黒白の分量などに気をつけて表現させることが大切ではないか。水彩画と版画を組み合わせるなど、さまざまな技法にチャレンジしてはどうか。また、そこから版画の楽しさをつかませたらどうか。

- 伝統に寄り掛かり過ぎてしまっていることが、モチーフの特定やこうあらねばならない式の限定的な範囲にとどまってしまうくらいが確かに感じられなくもない。そういう意味でもっとラフに構えて、子供本位の自由な発想を生かしていかなければならないと考える。特認児童の新鮮な感覚はここでこそ大いに生かされるべきと考えたい。牛の表現そのものも、完成度を高めるべくしての結果であるが、その作業プロセスにおいて、もっと具体的視点を適切に指導していくことで、しかるべき完成にむけての方向性を常にチェックすべきであると反省したい。面の構成や黒白の分量など基本的観点に立ち返り、真摯に受け止め、今後の反省点としたい。さらに、領域分野の仕切りを複合化して発展的にとらえさせることも子供の関心意欲をそそる意味では一考する余地ありと考える。

(3) 助言者から

版画の楽しさというのは、刷り上がりの瞬間ともいうべき、できあがったときの喜びである。形だけの伝統ではなくて、子どもたちの立場から深く見てやることが大切ではないか。又、一色刷りではなく、一版多色刷りにしてはどうかと思う。

2. 提言に関する研究協議

(1) 阿部雅美先生

◆提言のテーマ 楽しく自分らしさを体験させる
～どんな動物がいたら楽しいかな～ 「美原動物ランドをつくろう」

- ・初めて小学1年を担任したとき、“好きな絵をかきなさい”と指導しても《かけない》子供がほとんどであった。
- ・そこで、何故苦手なのかの原因を追究してみたところ、どうも心理的に「ヘタだから…、うまくできないから…」ということだった。つまり、授業の中では、子供は“上手に”つくらなくてはいけないと思っているらしいのである。
- ・それを受けて、「わかりやすい題材、興味関心が高い内容」として、動物をテーマにした“動物ランド”を試みた。
- ・—この自然公園にどんな動物がいたら楽しいか。その作品を作って遊んでみよう—
- ・お互いを認めながら、材料や道具を自分なりに考え、創作する。《これは、自主的に行っていた》

(2) 佐々木忍先生

◆提言のテーマ 楽しさにひたり伸びやかに表す造形活動と 共感し寄り添う指導
～自分らしい表現方法を選択し楽しくのびのびと表す版画の指導～

今までの実践として、紙版画では小学1年生「楽しいかいじゅう」に取り組む。藤山小では体験学習が盛んで、例えば、米づくり、花を種から育てること、藤山だいこ…等、感動体験から版画づくりを行っている。

この学年は1人なので、雑談的な導入から授業を行った。版画学習では、左右が反対になることを学ばせた。描けないときは、助言を与えて進めさせた。

3・4年生は、「藤山だいこ」を題材に取り入れた。自分たちが体験したことを通して行ったので、子供自身は満足していたようだ。

だんだん自分なりに自分の作品の良さを見つけることができるようになった。人数が少なくても色々な発想を持てるように心を砕いた。

(3) 意見交流

阿部雅美先生の実践から

- もっと子供の生活にかかわりを持った動物を題材にすべきと思われる。
- 子供の感性を引き出すことのできる材料をたくさん見つける方向で設定すべきではないのか。
- 形にこだわるのではなく、子供自身、つくりたいものがしっかりしていて面白い。
(例、木にのせてみたい、池の水を飲ませたい)
- 初めに自分で考えていたものとは多少ずれてしまったものの、材料の良さ、ちょっとした工夫の良さなど、他のものや小さいことでも良さを見つけて認めてあげることが大切なのではないか。

佐々木忍先生の実践から

- その子供の感性とは何か。例えば、マンガのキャラクターを描いたとしても、それはそれとしてその子供の感性と言えるのではないか。
- その子供の生活の中で、かくれている美しいものを見つけてあげることがポイントである。
- 提言綴り p 9 について、子供の描いた絵の良さをそのまま生かした方が、その子供らしさといったものを表現できるのではないだろうか。

授業者に関して

- 牛を彫り過ぎて、牛の良さが半減してしまったのは、残念である。
- 版画を学習活動として行う時の服装は、汚れてもいい服装でやらせることである。
- 授業をする中で、子供に作品をつくるためのイメージをうまく持たせているのではないだろうか。

助言者から

《伊藤先生》

- 若竹の子供たちは、無垢で素直な子供が多い。作品は素朴さが出ていてよかったので、これからも技術的な面だけにこだわらず、また流されないで子供の思いが伝わるように表現できればいいのではないか。
- 共同版画は、若竹文集の一部である。若竹文集は、日常の体験活動を作文に書きと

め、その中から個人版画、共同版画として製作している。教師が子供とよく遊び、その一体となった学級経営の中から生き生きとした作品が生まれるものと思う。授業を大学の講義のように考え、休み時間になると職員室に戻って煙草を吸ったりお茶を飲む若い教師がいるが、子供とたくさん遊び、また見守れる教師になってほしい。

《細見先生》

- 一日一日の子供の変化を大切にし、成長の記録としてまとめ、共同版画に入る前に、〔その子供たちがどういう生活をしてきたのか。〕〔どういう作品がその子供たちにとっての生きざま、あるいは生活体験が表れるのか。〕などを十分子供たちの考えと加味しながら題材を決めていく必要がある。
- 共同版画というのは、やはり『学級経営』が基盤となるので、今後も学級経営を大切にしながら行っていく必要があるのではないかと。



分科会 3

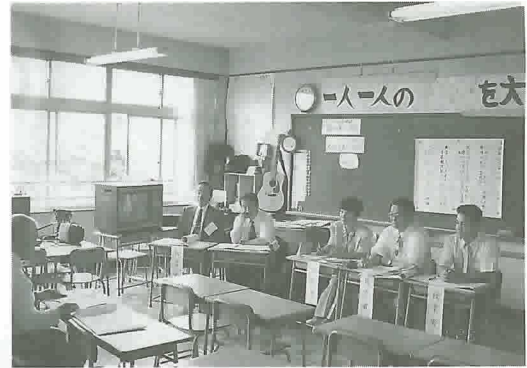
小学校第5学年「CMをつくろう」

司会者	別海町・豊原小	小原 緑
助言者	根室市・連盟顧問	桐澤 享
助言者	札幌市・東園小	藤井 正治
提言者	網走・斜里町・以久科小	石橋 一郎
授業者	根室市・花咲小	中嶋 能亜
運営・記録者	別海町・別海中央小	山田 妃呂美

討議の柱

その子らしい感性で表現活動ができる造形学習

1. 造形学習の意欲を喚起させる題材の選択と指導・支援の工夫
2. 子どもが本来もっている感性を表現活動でいかにのばすか
3. 子どものよさをみると評価のあり方



1. 授業に関する研究協議

(1) 授業者から

- ・子ども達は、根室に住みながらも根室についてよく知らない。
- ・ビデオは、家庭などにも普及しているが、子ども達は使い方をよく知らない。
- ・だが、興味はあり、今日の授業も楽しんで活動できた。
- ・根室を紹介しよう→テレビのCMから発想。

(2) 意見交流

- ・ビデオの扱い方について練習などはしたのか。
- ・最初の考えでは、計画の一時間目に入れていたが、機械に触りながら慣れてほしいと

考えて、削った。練習はしていない。

- ビデオをとってテレビ画面に映ったときに感動が広がった。今日の授業は、操作を楽しむ段階だった。自分が映るのが楽しい。何を作るのかというところに向かっていなかった。ビデオを触るのを楽しんでいて、CMを作る楽しみに至っていない。
- この授業はとても意義深い。機械の操作に十分親しんで、よいものをつくってほしい。子どもらしい感性を生かしたものを作れる教材だろう。
- 本来なら、3～4時間、子どもにらせてみたい。
- 子ども達は目的意識《根室のよいところを知らせる》をしっかりとっていた。その目的意識をまとめるキャッチコピーのようなものがあって、グループとしてのめり込んで行けるようになるといい。もっと何にのめり込むか、どんな感性を發揮するか見てみたかった。子どもは家にビデオがあっても使わせてもらえない。今日がはじめて使うのなら、どのように使わせるかを考えるべき。
- 先生がCMを知り過ぎている。子どもが自由に発想し、子どもに自由に撮らせてみて、どれとどれをつなげるとCMになるか…と考えさせる方がよい。
- 全体計画を、…①ビデオカメラに慣れる（2時間）→②撮影に出る（3時間）→③編集（2時間）のようにもできる。
- 実際に名所へ行ってみる、教室を出て触れてみることで、もっと子どもの感性が出る。
- 学校周辺や、自校など、身近な材料を生かしてみるとよい。
- とてもおもしろい教材だった。これからの新しい図工科の方向性と受け止めたい。
- 題材名の工夫を。子どもの活動を促す題材名は必要。

(3) 助言者から

- 視聴覚機器を取り上げた実践例は少ない。未知の教材観への挑戦だった。今日の実践からこの分野は広がっていく。
- なぜビデオかという検証が必要。《子どもにとって新鮮である。自由な表現が可能(ズームアップ・こまわり)。絵と音で表現できるなど。》図工科としてどのくらいやって行くかという問題もあり、他教科との統合や学年間の統合を検討していく必要がある。
- 「CMをつくる」活動に必要な物は、根室の①何を、②だれに、③どのようにして伝えるかという視点。
- グループでの活動についての必然性があいまいだった。機械の数にもよるが、個人でもよい、グループが必ずしも同じ人数でなくてもよい、などと考えるべき。
- 今日の目標については、操作に集中していて、「伝える工夫」が不十分だった。「今日のはりハーサルで、次は静かな所で本番だからね。」という教師の確認がもっと強く出るべきだった。工夫のポイント（キャラクターか、ナレーションか、ズームなどの

操作法かなど)をはっきりさせてやることで次時に生きてくる。

2. 提言に関する研究協議

(1) 提言

- デザインには、使用目的があり、使う人の立場に立って考える表現である。これからは、「他者への思いやり」や、「物や事への心くばり」をキーワードに、基礎・基本の内容を吟味する必要がある。
- 図工は個性を育てる教育と言える。自分らしさを見つけ表現することは、生きる意味を見いだすことであり、自らの存在を主張することである。また、作品を通して他者とコミュニケーションすることでもある。
- 教師の出番は、子どもの持っているイメージをどう表現させてやるかにかかっている。イメージを持っている子には技術指導をするが、イメージを持ってない子やイメージが弱い子にはどう支援するかが課題。
- 五感を通した体験に気づかせてやること。(追体験、想起)
- 創意工夫させるための手立てをとること。→表現しようとする作品のテーマや目的をしっかりと捕らえさせる必要がある。何を、どんな材料で、どのように作る(描く)か。
- 鑑賞活動の観点が必要。→よい作品とは、子どもの相違や工夫がしっかり表現されているかどうか。

(2) 意見交流

- 低学年のときにもっている自由で豊かな発想が、高学年になると弱くなってしまう。
- 感動は待っていてもだめ。感動を仕組む、場を仕組む、環境を整えるなど、本時だけでなく造形活動全体で育てていくべき。
- 自由に好き放題できた時間が減少した。
- 都市部と農村部の児童の、触覚表現(ボールを持った手を大きく描くなど)の出現率を調べたことがある。農村部に多かった。経験量の違いではないか。
- 経験がない子に体験させる事が大切だが、教師の意図が出過ぎると「体験させ過ぎる」ということになってしまう。
- 体験させる必要性は、生活科などとの関連も含めて、図工でも造形遊びの増加につながっている。
- 体験には、地域性があり、環境による違いは否めない。都市部では経験の少なさが問題で、郡部では、慣れによる感性のぶさが気になる。
- 生活体験についての話が出たが、図工科でも一つ大切なのが表現体験。大きく分けて「表現」と「鑑賞」。「表現」には①造形遊び②絵や立体に表す③つくりたいものをつ

くるがある。今日の授業は、これから大事になってくるが、どこに入るだろうか。④映像に表すという部分か。「映像」は、平面でも立体でもないもので、いろいろな表現方法を持っている。表現体験＝表現する喜びを広げる必要性があり、その意味で今日の授業は意味がある。

- 体験により感動する。それを表現活動によって見直す。そこでもう一度感動する。一層感動する。ここで教師の出番＝支援となる。上手に感動場面を生み出せる教師がいる。感動する姿を見せられる教師が多い。
- 感動場面を生み出す＝語ること。表現の目的を語る。感動を語る。それと、子どもとのコミュニケーションをうむこと。
- 良質な生活経験、造形と環境を整えること、そして感動を掘り起こすことが大切。
- 子ども同士、子どもと教師、子どもと社会など、人間関係やコミュニケーションが、絵を描くためには必要で、また、絵を描くことで育っていく。
- 見慣れたものの新しい感動を子どもに知らせていくことも支援のひとつ。題材を与えるときに、目的意識を持たせること。
- 表現方法を、子どもが選べるのが理想的。人との比較ではない表現ができる安心感が必要。

(3) 助言者から

- イメージを育てることは、幼児期の現体験、幼稚園教育の現場から始まっている。生活や自然の中で、上質な体験（理・真・徳＝美的体験）を学校生活全般から育てていく。
- 教師の支援としては、教師が新しい体験や感動を教室に持ち込むこと、教室環境を作ることから始まる。
- 指導案作りについて、教材の特性をもっと明らかに。活用の手立て（＝素材の教材化）をはっきりさせる。指導の過程についても、授業の構造化をしっかりとる。それを児童の状況に照らし合わせて組み立てていく。



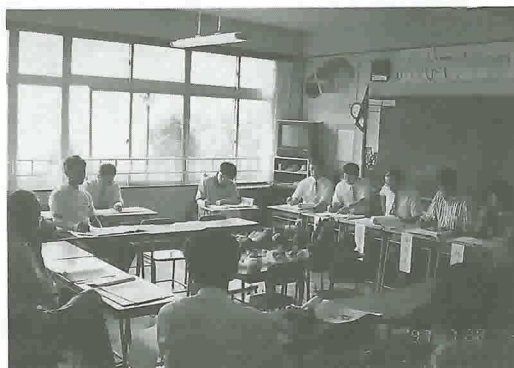
分科会 4 小学校第5・6学年(複式)「温根沼の砂や貝殻等を使って土器を作ろう」

司会者	函館市・昭和小	鈴木秀明
助言者	釧路・厚岸町・床潭小	中島欣也
助言者	中標津町・中標津小	大井誠一郎
提言者	十勝・幕別町・中里小	和田浩司
授業者	根室市・幌茂尻小	煤賀克文
運営・記録者	根室市・花咲港小	鈴木悦子

討議の柱

その子らしい感性で表現活動が発揮できる造形学習

1. 造形学習の意欲を喚起させる題材の選択と指導・支援の工夫
2. 子供が本来もっている感性を表現活動でいかにのびすか
3. 子供のよさをよみとる評価のあり方



1. 授業に関する研究協議

(1) 授業者から

- 少子化で複式になった。子供達は根室市に8キロというところなので、都市化傾向、明るく個性的でいろいろな考え方も持っている。
- “地域素材を生かす”ということで、地域の遠浅の海でとれるホッキやアサリ、砂などを取り入れた。また、先住民族や遺跡や出土品に着目して何とか授業の中で取りあげてみたいと考えた。4月に赴任したばかりなので地域の粘土はよくわからないのでセラミドを使うことにした。
- 5・6年生が自分の思いを生かした土器を作ることだが何点か制約がある。底がとがった特徴をもつ温根沼式土器や温根沼で採れる砂、あさり、ホッキそれにこの

土器のもつ押し型紋様という小枝に矢羽のような紋様を粘土に押し付けることなどを授業で取り上げてみた。

(2) 意見交流

- 温根沼の素材を使ったが題材の選択は適切であったか。
- 温根沼式土器に接する機会は資料センターに土器片などがあり資料的に見ている。キャンプなどで石を拾って土器でないかと持って来たりかなり身近なものである。
- 自由な発想の土器と温根沼式土器との兼ね合いは全く自由な物を作るということでなく今回は制約の中で自分らしさを出させるようにした。
- アイディアスケッチはさせるが作っていくうちに造形的にでてきた瞬発のアイディアを先行させた。
- 粘土の中に貝殻を入れて焼くと剥奪する。収縮率により素焼きの粉を入れるのは可能である。砂を入れると3日間ぐらいで焼いても割れないが、子供にはその発想がなかった。砂や貝をいれるとザクツとした感じに仕上がる。張り付けた貝はとれてもよいと授業者は考え、子供に興味をもってもらいたい、模様の面で創造性を発展させたいという意図であった。
- 温根沼式土器が出て、子供が感性を刺激されて作ってみよう、縄文人の追体験をして自分も作ってみようということであった。
- 野焼きでは砂を入れると割れないと言われている。
- 野焼きの場面では焼けていく過程も大事にする。色が変わっていくのを感動したり、友達のと比べて違いに気づいたりする。
- 素材や粘土によって火加減を調節する。
- 一般的には充分乾燥させてあぶりの段階を大切にすると割れは少ないが、セラミドはその必要はない。
- 牧草を巻く、灰をまぶす、トタンをかぶせる、砂を入れるなどすると割れが少ない。
- シャモット（焼いたものを粉にしたもの）を入れることは空気の逃げ口を作る、水蒸気を逃がす効果がある。セラミドにもシャモットのような粉が入れている。
- 野焼きは火の当たりがまんべんにいかない。砂を入れたり、あぶりを多くすることで割れが少なくなる。

(3) 助言者から

- 校長が授業をやるということはすごい事だと思った。そういう学校経営をしているのは素晴らしい。地域の土器をもとにして、粘土から作っていくことを教育課程に位置づけ、1年生から6年生まで学校として野焼きに取り組むと、6年生までにかんがりの経験が出来る。いい環境の中で地域に根差した教育ができる。作業中に粘土が乾いてきてひびが入ったが、経験すると手を湿らすことによって解決できることもわかってくる。
- 子供達が先人の土器を追体験するという案外子供の発想では古代人を小馬鹿にする、

いうことも、実際に土器を作ることで失敗したり、壊したりしながら奥の深さに気づくのではないか。1～6年の流れの中でいろいろやってみる、砂を混ぜる、地域の粘土をもってきて作ってみるという所までに発展することが一つの感性を呼び起こすものではないか。

2. 提言に関する研究協議

(1) 提言者から

- 6年前、近くの川で粘土をみつけ成形した。キャンプで野焼きをやったが、真っ赤になって焼けておもしろい。海の近くでやるのは湿気が大敵なので充分乾かすか、トタン板を敷くとよい。翌年、新たな粘土を発見、素焼きにするとレンガ色になり、本焼きで溶けた。肉厚にならないようにして楽焼にした。保護者の畑で白っぽい粘土がでたので、河原の砂を混ぜ、溶ける粘土をコーティングした。学校の半径1キロメートルぐらいに出た粘土で作った作品である。
- 体、図、音は全校一斉授業をしているが、題材によっては分けている。粘土学習は全校同レベルでできる。
- 地域素材を児童会活動に生かしている。素焼きの植木鉢を作り、花を植えPTA全戸に配布したり、交通安全のマスコット作りをした。

(2) 意見交流

- 成功率をねらうと地域の粘土は扱いづらいが、地域素材は造形意識を芽生えさせる。
- 地域素材を積極的に使うことは身の周りから造形意識を芽生えさせることになる。
- 彫塑として作って、中をくりぬいて焼き物にする。芯材に紙を使うと中が焼けて焼き物になる。
- 板作りの場合は時間の関係もあるが、教師側が作り、子供達が組み立てると低学年でも対応出来た。
- 教師側が粘土の材質をおさえ、教材を子供に与える準備や教師が経験しておくことは、基本になる大事なことである。
- 1学年4学級あるが全学級で取り組んで、素焼きをやる段階である。土粘土を経験しないで小学校を終えてしまうことも多いので、どこかで経験させたい。
- 粘土を冬凍らせておくと、春になるとバラバラになって使いやすい。出土したばかりの圧縮された塊の粘土はねるのが大変である。いったん粉にした方が扱いやすい。
- 最近の子供は泥遊びは嫌うが粘土遊びは喜んでやる。
- 粘土を削るという根気のいる作業を喘息学級でやっていた。子供が体を通して自然のものに触れるのは教育として価値がある。
- 絵の苦手な子も実用品を作るなど、子供にとって粘土は取り組みやすい形にしているのが興味を示す。
- 教科書との関係では、小規模校なので独自に組んでいるが、少人数では多くの作品に触れる機会が少ないというマイナスの面もある。

- 小規模校なので上の学年が下の学年を教えたり、手伝ったりという場面もある。
- 学校が小さいから出来るのではなくて、大規模校ではどの程度取り入れられるか工夫しなければならない。
- 彫塑としてとりいれ、焼ける物は焼くといった考え方ができる。
- 窯を扱う教師が居ると焼くがそうでないと焼かない。若い教師と一緒に楽しみながら焼くと技術も伝えられる。
- 大体どんな物になるかということで、意識づけの意味でアイデアスケッチは2パターン程書かせている。(忠実な作品に仕上がっている)
- “自分のいいなあと思うところを見つけてみよう”ということで発表会をもっている。ほかの子も感想を寄せている。

(3) 助言者より

- 平面は抽象の世界でなかなか思うように表現出来ないが立体は具象である。子供達が自分の触覚を大事にしながら本物の芸術活動なのだという自覚しながら伝えている。立体を扱うのは人間の本性、嬉しさに触れるもので大事な学習である。手を使う作業は大切にしたい。粘土を使う経験をさせたい、セラミドは使いやすい粘土である。1～6年の縦のつながりを大切にしているので年長の作品を見て下の子どもたちがより程度の高い作品を作っていこうとする。経験を積み上げてより良いものを作ることになる。特活や図工での縦割りの学習も計画していきたい。ふる里学習は豊かき、温かきが伝えられて、自然から受ける恩恵を通して、自分らしさを通して温かさを伝えていく。自然の本物の色に触れながら学習していくことは大切だが、教師が目を向けさせないと経験出来ない。学校ぐるみで思い切って取り組んでほしい。
- 出来た作品をビデオで見ると、小川のほとりに作品を置くとヨーロッパのスペインのいなかに行ったらこういう家があるような気がする。子供がほとりに置く物は環境的発想、社会的発想などいろいろな面から引き出されたものである。実際に町の図工サークルにはいろいろな先生方が集まってくる。たいへん意欲的な先生もいるが、例えば全部同じパターンの規格にはまった茶碗を作らないと評価できないという先生もいる。本校は1学年3クラスなので文化会館の大型窯で焼いてもらう。粘土の焼きざまを見る機会はないが、野焼きの教育的効果は計り知れないと思う。汚れの経験だが、最近はお-157の食中毒の衛生的問題等もあり抗菌グッズが売れている時代である。子供達が気持ち悪いから出来ないということがあったが、感性が磨かれる場が少ない。頭の中で何とかしてしまう。子供達のせっかくのものが埋もれて中学校に送り出すことになる。
- 立たせる、厚さの工夫、穴の大きさや実際にロウソクを入れた光のもれ具合などは子供達のお互いの評価につながっていく。アイデアスケッチはどんどん取り入れて作品に結び付けていくカリキュラムの組み方も大事である。

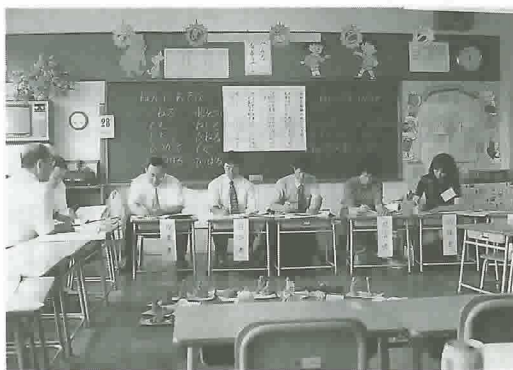
分科会 5 小学校第1学年 「粘土あそび」

司会者	檜山・乙部町・栄浜小	中川 眞一郎
司会者	釧路・教育大附属小	内山 博之
助言者	標津町・薫別小中	小野寺 宏二
助言者	網走・網走市・網走西小	竹内 洋嗣
提言者	十勝・帯広市・開成小	山口 雅子
授業者	根室市・落石小	山口 長伸
運営・記録者	別海町・上春別小	熱海 桂子

討議の柱

その子らしい感性で表現活動が発揮できる造形学習

1. 造形学習の意欲を喚起させる題材の選択と指導・支援の工夫
2. 子供が本来もっている感性を表現活動でいかにのばすか
3. 子供のよさをよみとる評価のあり方



1. 授業に関する研究協議

(1) 授業者から

- このたびの授業にあたっては、学級担任ではなく、図画工作を担当している者として、低学年の基礎基本を焦点に当ててみた。
- 「粘土」について…取り扱ったのは、油粘土ではなく土粘土の方が良い。
- 「粘土遊び」…作品をつくるというよりも、楽しく遊ぶことを重点にした。そういう意味では、作品を残すことよりもプロセスが大切であることをしっかりとおさえない。
- 本時の展開については、授業の中での約束ごととして、次のルールをしっかりと守ることを徹底させてみた。

◇ねん土は、ねん土でひろう。
◇ふくについたら、かわいてからとる。
◇ねん土は、すぐにひろう。

※1年生であるが、約束は徹底されていた。

(2) 意見交流

- 学級担任ではない授業者でありながら、小学1年児童とのコミュニケーションは素晴らしかった。
- 授業者の人柄の素晴らしさは、45分間の授業の中に人格者としてあらわれていた。教師と児童との交流風景がよく見られた。児童と一緒にになって教師が感動を分かち合っていた。そして、共感していた。
- 普段の学習で油粘土を使った場合は、匂いなどで気持ち悪くなってしまいがちである。また作品を残して展示しておく場所も無い。
- 「好きなものをつくってみよう」と言われると、なかなかつくれる実態である。
- つくったものは、どういうわけか“小さい作品”になりがちである。
- 児童4人だけの授業を初めて参観した。教師と子供のコミュニケーションが素晴らしかったし、子供たちは遊びの中からつくりたいものを自由に発想していた。
- 本題材の指導計画4時間構成における「表現活動～目、耳など五感を使って～(2)「構想の段階→形づくり」と(3)「心を入れる、思いを入れる」の違いを知りたい。
- 平面的な作品でしかつくれる子がいる。
- 出来上がりだけで評価をしない。つくっている過程やその間のつぶやき、発言を聞き逃さないことである。そこでもしっかりと評価する。その場合、一般的には座席表で子供の良さを記録化する。

(3) 助言者から

- 粘土の後始末の理解については、まず近くのバケツで手を洗い、次に水道で洗うという2段階方式の配慮がなされていた。
- 「今日、何をつくる」ではなく、実際に粘土をたたいたり、捻ったりしているうちに“何か”をつくっていくのは難しいことである。また、うまく上手につくろうと考えれば考えるほどにできなくなるものである。そういう意味で、今日の授業は、1年生の柔軟な発想ですすめられていくことができ素晴らしかった。
- いわゆるセット教材やパック教材だけで、感性が育つのだろうか。画用紙や厚紙など、材料を工夫して取り扱うことでアプローチできるのではないか。

- 粘土の授業は、ダイナミックであるべきだ。児童1人に対して、3 kg以上の材料が割り当てられ、文字どおりダイナミックな作品になっていった。
- 「粘土の命」など、表現が面白かった。出来上がった作品を残すことだけでなく、作品を“もどす”ことも大事である。
- 粘土の素材については、【土粘土の管理の仕方】【油粘土との違い】についておさえることにポイントがあろう。
- 「感性」を育てることについて、粘土は人間の感性を磨くには大事な素材であろう。また、創造することは、それを感じる心が大切である。

2. 提言に関する研究協議

◆ 提言のテーマ ～創作意欲を喚起するために～
「学校環境を生かした表現」

(1) 提言者から

- 自分のアピールとして、図工に関する《思い》をカードに書かせて調査してみた。
- 人の体のバランスについては、だいたい《知っておく》必要がある。
- 「粘土」の指導のポイントをおさえて、児童の気持ちを引き出した上で作業を進める。
→基本形をおさえる。→頭の大きさやバランスなど。→その後、自由に表現していく。
- 「風の音、風の形」では、錐、糸鋸などの器具の使い方を押えさせる。ここでは、危険が伴うので集中させて聞かせる。
- 「学校環境を生かした表現」→略～（スライドでの発表）
- 「自己評価カード」は、学習活動を振り返ってのカードとして取り入れている。心の変化や制作のプロセスを知る上で重宝である。
- 「器具の取り扱い方」では、怪我をしないように、後始末を含めて注意をしていかななくてはならない。

(2) 意見交流

- 子供に満足感を味わせることが第一義である。
- 子供が製作中に困ったときに、どうしたらいいのかについては、教師の支援の仕方による。その場合は一斉指導と個別指導で行う。
- 加工粘土「クレード」は、使い易い粘土である。
- 「造形調査」については、勘違いをしないでほしい。これは、あくまでも造形能力を調査するものでなければならない。
- 「支援」と「指導」について考えると「指導」という言葉を嫌ったことである。「支

援」は、①個別に ②興味がどれくらいあるのか ③能力がどれくらいあるのかを “知る” ことにある。

- 何故《授業》をするのかについては、「題材の加工」として、子供が果して食いつくように加工しているのかどうか。「研修」として、研究授業を積極的に推進しているのかどうか。「素材を生かす」として、例えば、“髪の毛”を表現する手だてとして一般的には、【毛糸や綿】が連想されるが、それだけではなく、もっとあらゆるイメージを駆使していろいろな材料で試行することが大切である。《選択する力》《加工する力》《判断する力》ということで授業のポイントとしたい。

(3) 助言者から

- 材料の準備については、できるだけ可能な限り、児童自身で用意することが望ましい。
- 「指導すること」と「気付かせること」を使い分ける心がけが肝要である。これは、毎日の授業で悩んでいることと同じく当てはまることである。
- 彩色の際に、端から塗っていく子供が意外と多い。これは、視野が狭い証拠で、もっと対象物をよくみる目を育てねばならない。



分科会 6

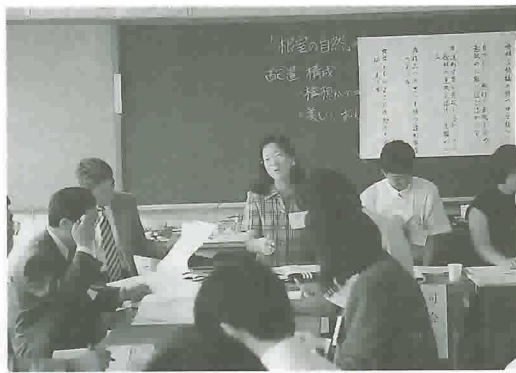
中学校第1学年 「石に描く」

司 会 者	中標津町・中標津中	庄 子 展 弘
司 会 者	胆振・室蘭市・鶴ヶ崎中	佐 藤 宏 茂
助 言 者	根室市・和田中	本 川 勝 敏
助 言 者	胆振・苫小牧市・光洋中	佐 藤 公 毅
提 言 者	根室市・厚床中	和 嶋 弘 美
提 言 者	根室市・和田中	三 浦 正 輝
授 業 者	根室市・柏陵中	長谷川 恵美子
運 営 ・ 記 録 者	根室市・歯舞中	小 林 玲 子

討議の柱

自分らしい感性で表現を深め、意欲的に取り組む造形学習

1. 造形学習の意欲を喚起させる題材の選択と指導・支援の工夫
2. 作品の思いを培う造形学習のあり方
3. 子どものよさに共感できる評価のあの方



1. 授業に関する研究協議

(1) 授業者から

- ・自分の身のまわりの自然の美しさに気づいてほしいねらいを持ってこの題材を選んだ。普段何げなく通り過ぎる石ころだが、よく見るとおもしろい形をしており、私自身子ども心に戻って楽しむことが出来た。
- ・比較的画用紙に描くことが苦手な生徒が多いクラスではあるが、夢中になって作業に取り組んでいた。また、「自然との対話」の単元をもとに、優れた作品を作らせるといよりも、生徒が生き生きと楽しんで作業を出来るように働きかけた。

- 石に描くとき、動物と限定せずに発想の幅を持たせた。
- 授業の中で実際に海へ行って石を拾いたかったが行事等で不可能だった。しかし徐々に生徒が自ら枝やサビタの花など積極的に持参するようになった。
- 評価の観点からは誰が、どこに興味関心を寄せているか気をつけてみるようにした。

(2) 意見交流

◎授業最後の10分間の各班の代表者の発言がなかったのは？

- いつもは2時間で余裕があるが、本時、1時間の中で生徒達が作業に乗っている状態だったので省略した。

◎お互い「もっとやっていたかった」と言う気持ちを共通理解させてもよかったのではないか。また、班毎にまとめた意図は。

- 生徒同士の感性が刺激されて広がっていくと考えた。一人の作業としては困難と判断した。

◎普段の授業の様子は。

- あまり集中力がある方ではないが、指示を明確にするとしっかり出来る。また、中心になれる子をpushするとスムーズに行く。

◎テーマが生徒にとって興味のあるものだと感じた。

- 今回は、各班ごと事前に資料を集めてイメージを作っていた。

◎他の題材も含めて普段の授業で時間に追われるということはないか。

- この題材では、作業の流れの中でどんどん発想が広がって作品が増えていくので、時間内にはなかなか終了しない。他の題材でも、クラスの3分の2が完成時で打ち切る。持ち帰らせると作品が痛むので、未完成の生徒は放課後居残りさせる。

◎長谷川先生の雰囲気柔らかく生徒を乗せるのが巧妙に感じた。見ているものも発想がかき立てられた。授業の中にいくつもの要素が感じられた。

- 1 ポップアート…いずれ、ひとりひとりの箱につながってもいいのではないか。
- 2 (個々のイメージを集団のサブテーマに乗せて) 集団を意欲喚起させる。
- 3 イメージを話し合う…(班の協議の過程は?) 多数決や妥協ではなく個々のアイデアが蓄積し、より良いものを作り上げるものだと考慮する。

- 班ごとの完全な統一は強制していない。迷いや、回り道はあったが、特定の意見に引かれる事もない。個々のやりたいことを收拾した状態。お互いが褒め、認めていた。

◎クラス内の人間関係に大きくつながっている。自己評価に総合評価(生徒同志の評価)を加えては。

◎自己評価は国語的能力がかかわってくるのであまり考慮に入れないが、相互評価の「相手を認める」「お互いを高めあえる」ところは素晴らしいと思うが。

◎ただ、書き留めることが苦手な生徒の負担にならない程度で、毎時間は避けるべきでは。

(3) 助言者から

- 石はレリーフ状態で片側塗装、石は重ねても可、イメージを持って石を選ぶ、別の材料を加えるのか、など生徒は把握しているか。
- 石と題材について見ていて感動したことがたくさんあった。どんな発想をするのか興味深かった。またいいものはみんなに提示して教師が褒めること、自己主張を認めることも大切である。

2. 提言に関する研究討議

(1) 提言者から 〈和嶋弘美先生〉

①一本線の指導

- 普段やっていることを元に資料を作った。小規模校のため小学校から変わらない人間関係や、お互いの評価が固まっている。赴任当初、授業がなかなか成立しづらかった。初任者ということもあり、方法が分からず、自由にやらせたら大変なことになった。やがて、生徒のやる気が起こる楽しめる方法を徐々に考えていくようになった。

◇集中力が必要なことをやらせる。

◇生徒が飼っているペット（犬）の話題から。（提言集参照）

- 集中力がついてからグローブなど、ものを見て描かせることにした。生徒が乗って来るまで大変だが、描き終わった後の充実感がある。1年生の最初がっちりやると後に、習慣となる。

②人物画の指導

- 苦手なことの克服を目的としている。その人のイメージにあった服装、ポーズを自由に設定する。何度もクロッキーをさせてから、画用紙に本描きをさせた。水彩絵の具での着彩に抵抗を持つ生徒が多いことから画材も自由とする。

③彩色指導

- 水彩絵の具の使い方を分かっていない生徒が多い。基本に戻って指導する必要がある。そこで、中学校から初めて使うポスターカラーを画材として見た。

④鑑賞指導

- お互いに批評カードを書かせ交換する。
- 小人数の田舎の学校で、生徒の創造力の発展させるには、感性に刺激を与えるにはどうしたらいいかいい作品に触れる機会を探している。

(2) 提言者から 〈三浦正輝先生〉

①ポスターカラーによるデザイン

- 写実的な絵が描けないから自分はいま描けないと言うコンプレックスを取り除きたい。上手な絵と良い絵は違うと言うことを指導したい。そこで、ポスターカラーを使用して作品を描かせる。水彩絵の具と違いポスターカラーは修正出来ることから作業がていねいになってきた。

②100年後の昆虫

- 明るい未来、暗い未来いずれかを想像し、現在の昆虫に比べてどこが発達、進化、退化するかを描かせ説明させる。自分のイメージを膨らませ、やる気を起こさせコンプレックスを取り除いて行く。

③プッシュデザイン絵画

- 回りを見ておもしろいと思う形を見つけてデザインさせる。固定概念を崩す。

④デッサン

- 鏡を渡し、身体の一部を拡大して描かせる。
いずれも、「絵は苦手だ。」という思い込みをなくす指導を心掛けている。

(3) 意見交流

◎家庭でのペットの話題が挙げられていたが、犬は描かないのか。

- 奇を衒って、興味を持たせる趣旨から遊びの要素を入れている。

◎どちらも小規模校で、似た考えだが、Ⅰ「削しゴムは使わずに一発で決める。」Ⅱ「間違ったら上から修正する」というように、手段は反対だが、お互いどう思うか。

- 自分の失敗から学びたい。
• 参考にしたい。

◎札幌の大規模校では観点別評価が不可能に近いぐらい細かくあり、小規模にはない戸惑いがある。

◎どちらにしてもこの二つの提言は趣旨が共通していると感じる。〇〇すると△△出来るという積み重ねが大切である。効力的である。

◎そっくりに描けないからと嫌う生徒が多い。他人と比べて自分を卑下する。そこで、自分の過去と比べて上達したということを確認させることが大切であると感じた。

◎作品の完成のイメージを教師が言い過ぎない方が良いのか、どこまで言ったら良いのか迷うところ。

◎とても地域に根差した授業をしていると感じた。「自然のままの形を生かす」、「石の材質、形の特徴を生かして」いるか疑問に思った。もう少し詰めておかないと評価のときに混乱すると感じた。

◎うまく描く方法、他よりよく見える方法を生徒は知りたがっていると思う。「ものをよく見る」ということ、「線」は形を描く基本になる。画一的になる恐れはあるが、それでも個性は出るので基本は大切であると考えている。

◎授業では生徒が自分の良さを出し合っていたように感じた。

◎意欲的に取り組んでいるにもかかわらず評価をしなければならないということに日々、疑問を感じている。

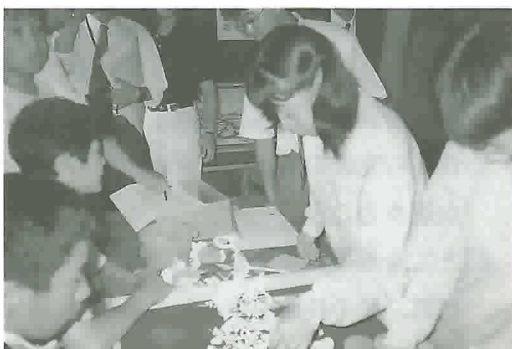
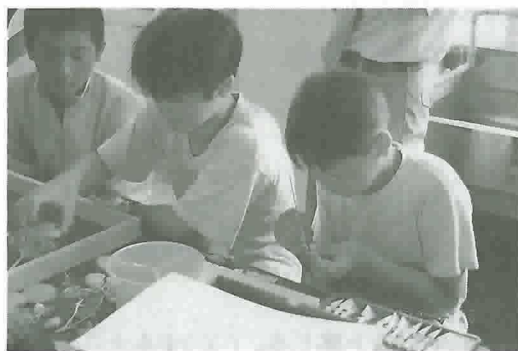
◎提言者は2人とも、実態により判断し、題材を使い分けている。信念を持って指導することは必要だが、新しいことを受け入れることに抵抗を感じる。うまい絵、いい絵の判断に迷いを感じる。これから指導法を学んで行きたい。

◎生徒が何を望んでいるかを考えるべき。写実性を望んでいるならば指導するべき。頑張っている子には高い評価を与えたいが、上には上がいてジレンマを感じている。

◎集中力を着けさせるうえで非常に参考になった。

(4) 助言者から

- 美術の専門がない学校が多い。そのうえで、やる気を起こさせる手順、失敗感を持たせないやり方はいろいろある。決められてはいないのでいろいろ見て自分に合った方法で選択して行くと良い。自分の学校の実態を把握してそれに合わせるのが大切である。



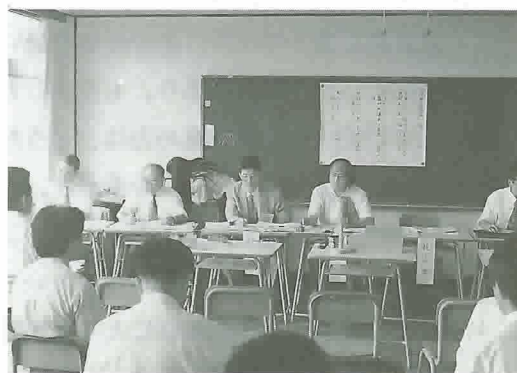
分科会 7 中学校第3学年（選択） 「鮭の皮を使って」

司会者	羅白町・春松中	大溝雅之
司会者	網走・網走市・網走第三中	里見貴史
助言者	別海町・野付中	川原和一
助言者	上川・旭川市・旭川中	山理利春
提言者	中標津町・広陵中	角田尚美
提言者	石狩・江別市・江別第二中	西村 司
授業者	中標津町・広陵中	舘山唯郎
運営・記録者	別海町・上西春別中	下西明美

討議の柱

自分らしい感性で表現を深め、意欲的に取り組む造形学習

1. 造形学習の意欲を喚起させる題材の選択と指導・支援の工夫
2. 作品の思いを培う造形学習のあり方
3. 子どものよさに共感できる評価のあり方



1. 授業に関する研究協議

(1) 授業者から

- ・今回の教材は、地元の素材を生かして何かで使えないだろうかと考え、地元の産業として、鮭の皮が手に入ることから選んだ。また、便利な社会になり、何でも楽に手に入るようになっていく中で、「鮭の皮」の素材から発想し製作していく過程に困難さ、自分で決定することの価値、楽しさを感じ取ってもらいたいと考えた。
- ・また、専門的なものであることや、時間がかかるということで、選択美術で行うことにした。

- ・「自分で作り出す」ということで、生徒は戸惑いを感じられた。最初は「皮が臭い」ということも一つにはあった。提示の部分で、ヒントを与えたりして引き出すことが足りなかったかもしれない。素材の広がりを持ちながら取り組めた生徒と、素材を生かし切れなかった生徒がいた。また、皮のなめしについての押さえが不十分であり、もっときれいになるはずと反省している。

(2) 意見交流

◎今回の教材は、用意など大変苦勞したものと言える。子どもにとっても、よい意味でショックな教材である素材であると思う。

◎作品の耐久性はどうか？

- ・樹脂性のものを塗るのだが、作品によっては、脆いものがあるかもしれないが。子どもには、この素材を使って苦勞して製作した満足感が得られると考える。

◎「素材を生かして」ということだが、生徒にどのように提示したのか？

- ・まず、乾燥した鮭の皮を見せ、素材から感じ取れたものを考えてみた。子どもからは、固い、色がある（白・黒）などが出てきた。強度については、あまり片寄らないように軽くふれ、自由に表現できるように心がけた。

◎皮と皮をつなぐ方法はどうか？

- ・接着剤を塗ってから、糸や針金で縫い合わせたりしたが、皮が固いので強く引くと破れてしまう場合があり、もう少し考えるとよかった。

◎子どもの受け止め方や進め方は、どうか？

- ・以前にスクラッチボードを手がけ、明度を表現した応用として進んでいたり、柔らかい皮を編み始める子や、ランプシェードを作ったりするなどして、子ども同士でお互いに影響あいながら進んでいった。
- ・発想の部分が、作品製作にとっても影響があると考えられるが、その点で今回は、アイデアを互いに影響を受けながら進めることができ、いろいろな作品につながったと思う。

◎アイデアスケッチの段階で、素材を生かしていないもの（巾着、ポプリ）があるが、作業は黙々と熱心に取り組んでいた。そういう場合の助言等はどうしているのか？

- ・ポプリについては、合わないのでは？といったところ「磯の香りを表現したい」といっていたのであえて変更せずに進めた。また、巾着についても、考え工夫しながら進めていった。

◎素材を生かすことにこだわるよりも、指導者の助言を乗り越える製作意欲があることを大切にすべきだと思う。

◎素材を生かすまで深くできなくても、地域の素材を使い苦勞して製作したという意味

で十分と言える。とても良かった。

◎素材を生かす点で、適したものが出で来ると思う。年々進めていく上で深まってくる
と考えるので、是非、続けて取り組んでほしい。

◎皮について3種類あった意図は？

- ・洗って乾かすものと、なめしたものなどで、子どもはほとんど洗って乾かしたものを
使ったが、薬品を使いなめす技術があるときれいなはずだと思う。

(3) 助言者から

- ・選択美術は、「子どもたちに喜びを与える」教科として進んでいけるものだと考える。
今回の教材は適していると言える。教材に関して、情報を集め取り入れなければならない。
そのために、地域のエキスパートに頼み、参加してもらうこともできる。
- ・「発想の矛盾」について一思い切って失敗を体験させる方法がある。しかし、明らかに
失敗すると挫折につながりそうな子どもには適切な指導が大切である。
- ・「工芸」に求められるもの一使いやすさ・見栄え・飾れることなど十分予測させる。
- ・身近なものでありながらも教材にすることで、とても新鮮な驚きから始まり、意欲に
つながっているものであった。

2. 提言に関する研究討議

(1) 提言者から <角田尚美先生>「手づくりを通して育てる感性」

- ・身の回りに「手づくり」のものが少ない中、実際に自分の手で作りあげることに意義
があると考えている。
- ・テーマを「根室に生息するもの」とし、自然に目を向けさせた。
- ・銅板を打ち出すときにも、身近なもの（古雑誌、木たがね）を利用した。
- ・装飾性をもたせるために木彫の額も製作した。

(2) 意見交流

◎油粘土、腐食液、スチールウール等を使って立体感や光沢などを出すともっとよい。

◎「銅板を打ち出す」という題材だが、テーマを「根室の動物」と限ったのは意図がある
のか。

- ・自然を見直す意味で進めたが、「好きなものをやりたかった」という子もいた。限
定しないとそぐわないものを作る可能性があるので限定した。また、枠には字を入
れて説明になってしまうものがあつた。

◎動物を描くときは、観察や何か参考にしたのか？

- ・図鑑やはがき等を使用した。

◎レリーフの感覚が難しいので、レリーフしやすい形を意識して考えるとよい。例えば
亀や甲らや葉っぱなど重なり合い、打ちやすいものなど良いと思う。

- ◎やりたいものと意図するものが異なる場合について一技術的なことについては後でやりにくくなる場合を考えさせ、最終的には個人の考えだがフォローが必要である。
- ◎テーマを「なんでもいい」としたとき、既成のキャラクターや文字などをかきたがる傾向がある。その場合は規制も必要。
- ◎「なんでもいい」場合、意図とそぐわないものにしてしまうことは、こちらの指導力や働きかけにも問題がある。
- ◎意図と違う場合に否定して意欲がなくなる場合も考え、1年で共通したテーマを用いるのも良いかと思う。例として一年生は「自然」など。
- ◎銅板は少し小さく、細かな細工ができないし、図案も小さくなると思う。飾れるようにしたのはよいことだ。

(3) 提言者から <西村 司先生>「アイデアから作品に仕上げていく力」

- ・既成のキットは、選ぶポイントとして自然に近い物で加工しやすいものであるものがよい。
- ・他の学校の評判から、生徒の意欲を引き出せる教材を用いた。
- ・テーマのあるパズルを作ろう。6ピース以上作ろうなどアイデアを出しやすいようにした。
- ・工芸の領域としては何か足りないものがありデザインの領域にも重なる題材でもある。

(4) 意見交流

- ◎技術と発想が伴わない場合問題が出てくるが、糸鋸作業のときはどうだったか？
 - ・教え合ったり、やってもらったりして進んでいった。図案を蛍光ペンで書き、間違いをふせいだ。
- ◎刃についてスクリュエー型ものは高価であるが扱いやすい。手引きのものを用意すると直線を切ることができ、待ち時間がなくせる。また、板は木材やさんに頼むと安い。技術科とのからみを考慮する必要がある。

(5) 助言者から

- ・工芸は子供が喜ぶ題材である。完成し家に飾れることが大切である。
- ・意図と違う場合の指導助言は意欲を持たせるもので、納得のいく説得ができるように。
- ・鑑賞～絵を見るだけではなく、お互いの作品を見せ合うなども鑑賞になる。
- ・発想を引き出す指導～見せることが手っ取り早いですが、発想がなくなることもある。
- ・合理的な授業を進めることが大切。テーマ・相乗り・身近な道具など
- ・安全に注意する。～道具の正しい使い方の指導

分科会 8 高等学校第2学年 「根室のガイドマップ」

司 会 者	根室市・柏陵中	久 保 英 樹
助 言 者	標津町・連盟顧問	清 水 克 美
提 言 者	札幌市・札幌丘珠高	本 田 勝 也
授 業 者	根室市・根室高	加々谷 由理子
運 営 ・ 記 録 者	別海町・別海中央中	齋 藤 由紀子

討議の柱

自分らしさを主体的に求める造形学習

1. 生徒の心から美的感動を引き出す指導・支援のあり方
2. 発達段階に応じて発展する造形学習のあり方
3. 子どものよさに共感できる評価のあり方



1. 授業に関する研究協議

(1) 授業者から

- 研究授業だからと言って、特に気張らず、普段通りの授業のイメージで行った。その他は、授業案の通り。
- 今日の授業を導入として、作品は夏休み中の課題とし、2学期に提出とする。

(2) 意見交流

【授業案から（1，2，4，5について）】

- 題材設定について、例えば「個性あふれる～」とか「立体的な～」等、もう少し生徒の興味・関心を引くようなものの方が良かったのでは。今、あらゆる所、あらゆる機会に「個性」が重視されている。そういう中で、その子にしかできない表現等

をもって追求させてみるべきだったのでは。生徒に、郷土愛よりも作品に対する意欲づけさせることを優先させるべきでは。美術というよりむしろ社会的要素が強い感じがした。

- 1時間の授業でやるには、多少無理があったかも。もう少し工夫が必要。1時間の授業で終わらせて、その後は夏休みの課題にしてしまうのは惜しい気がする。題材としては、結構面白いと思う。
- もし、夏休みの課題にして完成作品のみ提出という形をとらずにすべて授業でやるとしたら、この後、どのように展開させていくつもりか。その辺りについてかなり興味や関心がある。
- 本時の目標のア（根室について考察し、歴史や風土に触れる）は、目標としてとても良いと思う。ただし、イ（作例から、構成のヒントや工夫を学びとる）とウ（テーマとなる題材を探し、具体的なアイデアを出す）については、造形的な工夫をする…とか、高校生なりの造形性を強調する…とか、という点を目標にしてみてもいいだろうか。

【本時の展開について】

- 資料がプリントのみなのは、ちょっと物足りない。生徒に下ばかり向かせる事になってしまう。美術の時間なのだから色とかもどんどん使ったり、スライドを見せるとか工夫が必要。何となくこの授業のヤマ場が見えてこない。このガイドマップを誰に見せるのか。対象者を意識的に考慮して製作させてみるのも一つの手法であろう。そういった事などを自分たちで決めさせて、プリントに書き込めるようにしたらどうだろうか。
- 《導入部》が弱いと思う。つまり、本時は、全体計画の導入部にあたるわけだが、その中でも特に本時の流れの中での導入部が弱いという意味合いである。《何故、根室のガイドマップを作るのか》の理由に「自分たちの郷土根室をよく知るため」だけではインパクトが弱い。地図を作るための導入部で、生徒にもっと興味や関心をひかせる工夫が必要で、生徒の意欲づけにもつながる。
- また、「どんな地図でもよい」では、逆に生徒は困ってしまう。例えば、プリントに書き込んだもの（根室十景など）すべてを使って書いてみるとか…。
- 今日、授業に来なかった生徒へは、どう対処していくつもりなのか。
- 休み明けに提出される作品の出来栄の予想はどうか。
- 本時の展開導入部で参考作品を提示した方が良かったのではないかな。その方が生徒は具体的なイメージが浮かび易いのではないかな。
- 「郷土について知ろう」という学習のねらいとしては、地域性を生かしているすご

くいいと思う。札幌などの大きな街では逆にできないことだと思う。

- 今回の研究会で終わらせることなく、また、夏休み中の課題で終わらずに、ぜひ2学期の授業でも続けて行って、より深く展開させて行ってほしいと思う。
- 夏休み中の課題は、アイデアだけ、あるいは資料集めだけにとどめて、本格的製作は2学期の授業でというふうにしたらよいのではないか。

【評価について】

- 高校は絶対評価なので、その点では中学校より気が楽というか、現状では、中学校では小学校の絶対評価と高校の絶対評価に挟まれて気の毒である。現在勤務している高校での私の評価の仕方は、常に《私なりの評価》を行っている。目にわかるような（生徒がすぐわかる）評価は、やっていない。たとえ、うまくてもどんなに技術的に優れていたとしても、自分の力を出し切らない生徒よりは、一生懸命に努力と工夫をしている生徒に高い評価を出している。

(3) 助言者から

- 課題を与えるときに最も気を付けなくてはいけないのが、「自由にやりなさい」といった指示だと思う。一見、子供の可能性を大いに引き出しそうであるが、逆に子供はどう自由にしているか戸惑ってしまう。課題を与える際、条件設定の仕方に工夫が必要となってくる。その条件設定の工夫次第で、子供の作品にこちらが思いもよらなかった表現等があったりしてくるものなのである。



全道各地から260人

初日、公開授業と研究協議

「感性から発し躍動する力を育む造形学習を」とをテーマにした第47回全道造形(図工美術)教育研究大会は、昨(二十八)日、全道各地から約二百六十人の参加者を集めて花咲小学校で始まった。一日目は開会式、相模田吹奏楽部の歓迎演奏で幕を開けた。あぶら、中、高校合わせて八分科会で公開授業と研究協議などが行われた。

同研究大会は北海道造形教育連盟と根室造形教育連盟の主催。地元教育委員会などが共催し、管内の関係者による実行委員会(鶴谷町実行委員長)が主催している。根室管内では初の開催。

二十八日午前九時半から行

われた開会式では、吉田隆雄(根室)造形教育連盟委員長、鶴谷町実行委員長、会場地の小林哲夫校長が挨拶。根室英昭根室教育委員会委員長、大栄保根室市長が歓迎を込めて祝辞を述べた。

続いて相模田吹奏楽部が、同部顧問が根室の四季を表現して作曲したオリジナル交響曲「道南の四季を響かす」を演奏し、全道からの参加者を歓迎した。

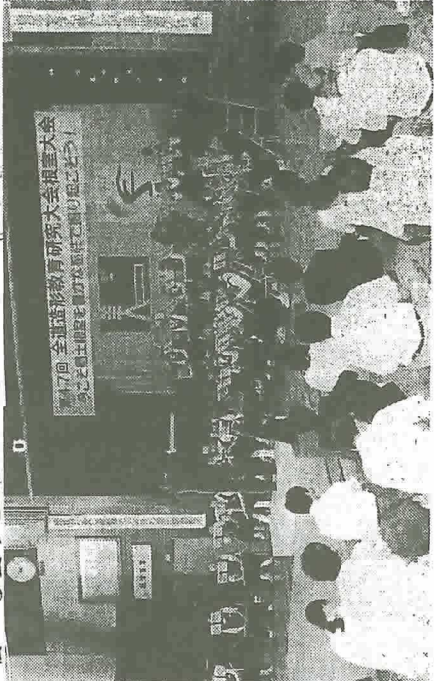
このあと同校に、花咲小の三年生をはじめ中標津・若竹小、登石小、相模田、根室寛校などの児童生徒と担当教員が迎え、粘土遊び(小学一年)やM作り(同五年)、石に輝くデザイン(中学二年)、

根室のガイドマップ作り(高校三年)など八つに分かれて、図工・美術の授業を公開した。

見学者は引き続き回廊で分科会に入り、実践質問を交わしながら研究協議を行った。

一日はのほか、市内のスケッチ旅行が行われた。

二日目は、午前九時から市総合文化会館を会場に、参加した教職員など自ら企画を生かした造形遊びを体験研修するほか、元上風連小学校校長で根室の物語研究に知られる野野武志さんを講師に迎えて記念講演を聞く。「演題は根室の創劇」。



相模田吹奏楽部の歓迎演奏で幕を開けた全道造形教育研究大会

根室新聞 一九九七年(平成九年)七月二十九日

北海道新聞 1997年(平成9年)7月30日

豊かな感性どう伸ばす

根室で全道造形教育大会



参加者自ら流木のオブジェ作り挑戦するなど創意工夫を凝らした研究大会

【根室】図工や美術担当の教員が集まって人間性豊かな教育の在り方を探る「全道造形教育研究大会・根室大会」が二十八、二十九の両日、根室市内で開かれた。

道造形教育連盟(会長・吉田隆雄)札幌市立路家小学校の主催で、今年で四十七回目。根室での開催は初めてで、全道の幼稚園から高校までの教員二百六十人が参加した。

初日は花咲小を会場に公開授業や分科会討論が行われた。一日目は根室市総合文化会館で参加者が海岸に打ち寄せられた流木を使ってオブジェを作る「造形遊び」に挑戦し、地域の自然や風土を生かした造形教育を体験した。

編集後記

根室にも、秋空にふさわしい夕陽色が日に日に早く染まる頃となりました。

「感性から発し 躍動する力を育む 造形学習を！」を根室大会のテーマに、研究部員一同が直播きした種を右往左往しながらもどうか育つように取り組んでまいりました。この一連の研究を通して、全道各地から参加された260名の先生方と共に素晴らしい交流を深めることができ、大きな収穫でした。

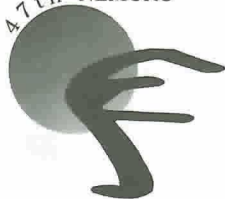
研究発表、研究授業、提言、分科会討議など時間的にも内容的にも研究をもっと深めたかったという声も少なくなく、造形教育への熱き思いが、参加者から滲み出てそれが十分伝わってきた二日間でありました。

ここに大会の要旨をまとめ、残された課題への解決に向けて、部員一同これからも日々実践研究に鋭意取り組んで参ります。

◆編集者◆

- ◎大井 誠一郎 (中標津小)
- 築 詰 佳緒里 (野付小)
- 山田 妃呂美 (別海中央小)
- 熱海 桂子 (上春別小)
- 下山 明美 (上西春別中)
- 小出 秀朋 (啓雲中)
- 鈴木 悦子 (花咲港小)
- 小林 玲子 (歯舞中)
- 齋藤 由紀子 (別海中央中)

47th NEMURO



第47回 全道造形教育研究大会根室大会

発行者 大会運営委員長 鍋谷 尊之
大会事務局 根室市立落石中学校
発行年月日 平成9年10月30日
印刷所 プリンティング サ ト ウ
中標津町東17条南6丁目 TEL (01537)2-4224

